

# 【作成中】

## リニア時代に向けた コンベンション施設・屋内体育施設に関する検討の 「基本的考え方」(素案)

2018年9月  
南信州広域連合事務局

## ○南信州地域を取り巻く状況と問題意識

- ・人口減少、少子高齢化、若者の流出という地域課題にどう向き合うか
- ・リニアが通ることによる当地域の立地ポテンシャル(3大都市圏からの時間距離の短縮、アクセスバランスの良さ等)をどう活かすか
- ・リニア開通により形成される「スーパー・メガリージョン」「ナレッジ・リンク」の中で、日本全体さらには世界に対して存在価値を発揮できるか

## ○施設整備に対する慎重論

- ・コンベンションやスポーツで外から人を呼ぶと言っても、どれくらい利用されるのか
  - ・地元住民が利用できる施設を考えるべきではないか
  - ・大きな施設は、初期投資も運営コストも当地域では負担できないのではないか
  - ・利用度が少ない割に負担が多いのでは困る
  - ・身の丈にあった施設を
- 
- ・リニアで短時間に東京・名古屋に行けるようになるのだから、大都市圏にあるような施設は必要ない
  - ・リニア沿線の甲府、中津川でも同様な検討をしているはずであるから、競合しないように、差別化・棲み分けをしっかりとる必要

## ○考える視点

- ・リニア時代には、時間距離としては大都市圏の一部でありながら、自然環境と良質なコミュニティを基盤として「豊かな暮らし」ができることが当地域の最大の魅力(強み)  
⇒「暮らしの質」を高めることが若者の回帰、移住・定住の促進につながる  
⇒この地域の「暮らしの質」の向上に資する施設を考えるという視点
- ・「コンベンション」もリニアを活かしてこの地域に外から人を呼び込む「手段」の1つ。  
⇒コンベンション誘致に汲々とするのではなく(コンベンションを「目的」にしない)、  
当地域を訪れる必然性を創る(価値を創造する)ことが肝要

◎「コンベンション」「屋内体育施設」という枠にとらわれず、  
この地域の「暮らしの質」を向上させ、  
国内外の人が注目する「価値を発信・創造する」ような  
「見たことのない(県内唯一の)施設」を創るつもりで考える

○暮らしの質の向上

⇒「地域課題の解決」+「未来への期待(ワクワク感)」

○価値の発信・創造

⇒・ここにしかない文化や住民活動、地域づくり等を全国・世界に発信

・「学びの土壌」 × 大都市圏や世界との交流 = 新たな価値の創造

施設整備の大きなビジョン(コンセプト)は、

◎ここで暮らすことを自慢したくなる「誇りや自信を創造する」施設

◎国内外から人が訪れたくなる「価値を発信・創造する」施設

※加えて、コスト意識(事業性)は重要(イニシャル・ランニングともに)

## ○ビジョンの具体化

- 👉 まずは「どんなことがしたいか(使い方・コンテンツ)」を考える
- 👉 その際、その運営の担い手となり得る主体と協働で考える

- ・「住民の誇りや自信を創造する」「国内外に価値を発信・創造する」ために、具体的にどんなことができる施設にしたいのか(使い方・コンテンツ)を考える (「つくる目線」ではなく、「つかう目線」で考える)
- ・実際にリニアを使いこなすこととなる世代(高校生など)や外からの利用が想定される団体などからの意見を聴く
- ・施設の運営(或いは投資)の主体となり得る者と協働で考える  
(民間の知恵と活力を積極的に借りる) ※長野県との協働は大前提として  
⇒有識者、利用団体だけでなく、民間事業者にも検討に加わってもらう
- ・PFIを含む財源調達的手段と併せて、運営・マネジメントの在り方も検討する。  
施設の運営(或いは投資)の主体となり得る民間事業者と協働で考えることにより、「あれもこれも」の「無責任プラン」とならないように、事業性を踏まえて機能・規模を精査していく

## ○使い方・コンテンツの発想例①

### 【プロスポーツに触れ、本格的にスポーツを学ぶ】

- 単に住民の「観る」機会を増やすというだけではなく、子供・青少年がプロスポーツに触れ、触発される場を創る。
- 学校規模に関係なく、子供たちが各種スポーツを本格的に学べるよう、市町村・校区を超えたクラブチームを結成し、その活動拠点となる施設
- リニアの利便性を活かして、都市圏からプロの指導者も訪れて指導。ワールドクラスの選手の輩出を目指す(「ゴールデン・エイジ」の積極的育成)
- 週末には、プロスポーツのリーグ戦や大きな学生スポーツの大会も開催
- ラグビーやサッカーなどの屋外スポーツのクラブチームもクラブハウスを置いて、トレーニング等に利用。伊那谷各地のグラウンドをサテライトとして結ぶ(順次、芝生化)

### 【本物の芸術文化に接する機会を創る】

- 単に住民の「観る」機会を増やすというだけではなく、子供・青少年がホンモノの芸術・文化(時には娯楽)に触れられる場を創る。
- 文化系の活動に取り組む人々(特に若者)が切磋琢磨し、発表する場
- リニアの利便性を活かして、都市圏からプロの指導者も訪れて指導
- 音楽(クラシック～ロック～邦楽)や人形劇・演劇などのほか、バレエ教室やダンススクールなども

## ○使い方・コンテンツの発想例②

### 【伝統芸能・民俗芸能を国内外に発信】

- 地域内外の人々が伝統芸能・民俗芸能(祭り)を鑑賞し、学ぶことができる場
  - ・獅子舞や地歌舞伎、人形浄瑠璃、無形文化財の民俗芸能(祭り・踊り)などが定期的に公演
  - ・地域内の人だけでなく、リニアを利用して都市圏の人々も鑑賞
  - ・体験を通じて、担い手、支え手が育つきっかけに

### 【国際的に通用する若者を育てる】

- 地域の歴史・文化を学ぶとともに、外国語を気軽に学べる
- 海外からの留学生が日本の文化や日本語を学びながら、地域の若者と交流
- ITの活用により、地域の若者が日常的に世界各国の同世代と交流
- 伝統芸能や人形劇を通じた国際的な交流の拠点
- JICA駒ヶ根訓練所及びJOCA((公社)青年海外協力協会)(駒ヶ根)とも連携(「大使村構想」と連動)

### 【日本一の健康長寿の里を目指す】

- シニアスポーツの拠点となり、健康寿命の延伸に寄与
- 伊那谷アグリイノベーション推進機構(信大農学部ほか)やメディカル・バイオクラスター(南信州・飯田産業C)、バイオ・ビレッジ(民間)と連携
- 健康長寿を研究する企業、特徴的な取組をしている自治体、医療機関、研究機関等と協働して研究

## ○使い方・コンテンツの発想例③

【全国の公民館の「総本山」】

【フィールド・スタディの拠点】

【当地域の「公民館活動」を国内外の人が学ぶ場】

- 当地域の「公民館活動」を学びに訪れる大学・研究室らのフィールド・スタディの拠点(ex.学輪IIDA)
- 大学生・研究者らと当地域の住民が共に学び、地域課題の解決を図る
- リニアを利用して、海外からも「kouminkan」を学びに訪れる(ex. JICA研修、レガスピの事例)
- JICA駒ヶ根訓練所及びJOCA((公社)青年海外協力協会)(駒ヶ根)とも連携
- 文部科学省の社会教育部門又は関連団体の本部を誘致

【環境問題解決・環境学習の世界的拠点】

- 飯田市が「環境モデル都市」であることや再生可能エネルギーの活用が盛んである地域特性を活かし、国内外の環境に関する団体や学会が集う拠点となる
- ESDやSDG'sを学ぶ拠点となる  
(ESD活動支援センター(本部:渋谷、中部地方センター:名古屋)との連携/誘致)

## ○他地域・機関との連携・棲み分け

- ・500人規模までのコンベンション・展示会は「産業振興と人材育成の拠点」で対応可能であり、機能が重複しないよう整理する
- ・飯田文化会館の建替えが予定されているが、その内容は、本施設の構想を踏まえて検討される（飯田市と情報共有・連携）
- ・観光や物産などの地域資源に関する情報発信機能は、リニア駅周辺整備において担う
- ・圏域内外の体育施設・文化施設と、移動手段も含め、有機的に連携する
- ・「コンベンション」には必須とされる宿泊機能については、近接・近隣に民間投資を促すとともに、既存のホテル・旅館との連携を可能にする交通連携を検討する。また、この地域の特色である農家民泊も「学び」の要素として積極的に連携させる。
- ・圏域外からの利用者に対しては、周辺地域にある観光リゾート機能、農林業を含むホンモノ体験のアクティビティ、南アルプス・中央アルプスなどとの連携により、広域的な波及効果の拡大を図る
- ・国内外の関係機関と積極的な連携を図る。また、東京都内・名古屋市内に立地している機関については、誘致を視野に入れる。